# 石井勲の漢字教室

# 4 親こそ最良の教師

## I 親こそ最良の教師




### 第1章 ある脳障害児の成長の記録

#### 1 愛子ちゃんとの出会い

**突然の電話**

昭和四十九年六月初旬のある日のことでした。自宅の近所にあります幼児開発協会の代官山教室にいた私に、愛知県から電話がかかってきました。

その電話の内容は「脳障害児を持つ一人の父親だが、ドーマン博士の著書〝親こそ最良の医師〟を読んで、わが子にもぜひその治療を受けさせたいと思う。書物の中に先生のことが書かれてあったので、ぜひ先生に子供を診て頂いて、どうしたら良いかを指導してほしい。先生の指定する日時に指定する場所へ行くので、ぜひ頼む」ということでした。

おそらく、アメリカのグレン・ドーマン博士の書物の中に出て来た石井勲という名だけを頼りに、出版社へ問い合わせ、勤め先か自宅を教えてもらって電話し、さらにその行き先を調べて一刻を争って電話してきたものでしょう。その声には、わが子を良くするためには、どんな苦労もいとわぬ真情が滲ん

ていました。

そこで私は「わざわざ東京まで出て来るには及ばない。私が行って診て上げよう。私はたびたび関西方面に出かける仕事があるので、その折、途中下車して貴方の家にお寄りする。それまでの間に、私の著書を送るから、それを一通り読んでおくように」と返事し、早速手紙と一緒に、『石井方式・漢字の教え方（学燈社発行）』を送ってやりました。

私の送った手紙に対して、折返し返事が来ました。それから、その脳障害児、愛子ちゃん（父親の希望もあって仮名にしました）のことで、手紙が交わされるようになりました。この手紙を中心に、その教育の仕方と、それによって愛子ちゃんがどのように変化していったかを、お知らせしたいと思います。

**最初の手紙**

『前略、昨日、石井先生の御親切なお手紙と本を拝受いたしました。有難く、厚く御礼申し上げます。先生からのお手紙を何回も、夢ではないかと、家内と繰り返し読み返しています。もし、石井先生の温かいお言葉に甘えてお願いすることができれば、非常に幸いに思います。

道順は、新幹線を利用されてお越しと思いますので、岐阜羽島駅より小生宅まで、車で約三十分くらいですので、岐阜羽島駅へ到着されましたら、お手数ですが電話をして下されば、すぐに駅へ出迎えに行きます。

また、事前に、御都合の良い日時（羽島駅到着の時刻）を連絡して頂ければ、その時間にお待ちしております。何かと御多忙の石井先生にお手数を煩わしますが、どうぞよろしく御指導のほど、お願い申し上げます。』

私の手紙を、「夢ではないかと、家内と繰り返し繰り返し読み返しています」と書かれているのを読んだ私は、一日も早く行ってやらなければいけない、と思いました。

幸い、手紙を受け取って半月ばかり経った七月六日、大阪へ行く用事ができました。それでその日、大阪で講演を済ませると、直ちに帰途につき、岐阜羽島駅に途中下車いたしました。かねてそのことを知らせておきましたので、駅に出迎えてくれていた愛子ちゃんのお父さんに会い、案内されて、初めて愛子ちゃんの宅を訪れ、愛子ちゃんに会いました。



その時、愛子ちゃんは五歳五か月になっていました。

（これがもう二年早かったらなあと、その時、またその後もしばしば思ったものでした）

家族は、父親、母親、小学生の兄、愛子ちゃん、この親子四人。また、お父さんの御両親がそれほど遠くない所に住んでいて、よく行き来している、ということも聞きました。

愛子ちゃんは、正常出産で、一歳半までは極めて順調に成長してきました。一歳半になってよちよち歩きができるようになって間もないころ、近くの国道で、通りがかったダンプカーにはねられ、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負いました。数日間、意識不明のまま生死の境をさまよい、奇跡的に命を取りとめることができました。

けれども、頭蓋骨陥没の後遺症がひどく、身体面でも、重度の障害児になってしまいました。ただ、幸いだったことには、両親が協力して、愛子ちゃんの身体的な障害の、回復のための訓練に励みましたので、歩き方にぎごちなさはありますが、ともかく歩けるようになっていたことは幸いでした。

あとで述べますが、知的な教育は、肉体の成長発達と密接な関連があるものであって、身体面の訓練と並行して進めることが大切です。その意味で、両親が愛子ちゃんの身体面の、回復のための訓練に励んでいたことは、大変に良かったと思いました。

そういう訳で、これから教えようとしている〝漢字ゲーム〟も、これなら成功する、という気がして、明るい見通しを持つことができました。

なお、これまで、知的な教育訓練の一つとして、愛子ちゃんの名前に用いられているひらがな〝あ・い・こ〟の三字を、毎日教えていること、しかし、それがもう一年にもなるというのに、この三字のうちの一字をも、まだ覚えて読めるようにならない、ということなども聞くことができました。

一年間学習しても、かなが一文字も覚えられなかったことや、言葉を覚え、言葉を使う能力の低いこ

とについては、私は少しも心配しませんでした。これらは、知能が低いのですから当然のことで、漢字だったらきっと覚えるに違いないと考えていたからです。

そこで、『石井式漢字教育法』について、愛子ちゃんの両親に説明し、必ず毎日これを実行することを奨めました。その教育法というのは、〝漢字遊び（または漢字ゲーム）〟と私が名づけたもので、次のようなものです。

## 2 漢字遊び（漢字ゲーム）

### 第一日目――関心と反復

記憶の原理は〝関心〟と〝反復〟の二つで、これを〝記憶〟の二大原理と言います。とりわけ〝関心〟は絶対に必要で、そのため、子供に最初に与える漢字は、その子にとって最も関心のあるものを選ぶことが大切です。

例えば、苺（いちご）が大好きという子供だったら、最初に与える漢字に〝苺〟を選ぶことが最も有効です。こういう漢字は、教えられた途端に目を輝かしてこれを見つめるでしょう。そして、一瞬のうちにこれを頭の中に刻みつけて、その後、その字を見れば「あっ、僕の大好きな〝いちご〟だ」と叫ぶに違いありません。

さて、そのような、子供にとって最も関心の高い物を表わした漢字を書いたカードを用意しましたら、これを子供に見せて、「ほら、この字は、お前の大好きな〝いちご〟という字ですよ。〝いちご〟、〝いちご〟」と読んでみせ、およそ十秒間ほど見せます。

この時、「さ、お前もこの字を読んでごらん」と言って、子供に読ませ、「はい、よく読めましたね」と言って、子供を褒めてやるのはとても良いことです。

それから一～二分間たって（それまでの間は、親も子も何をしていてもよろしい）先ほどと同じように、十秒間ほど漢字カードを見せてこれを読んで聞かせ、読ませてみます。そしてさらに、もう一度、今度は二～五分間後に、まったく同じことを繰り返してやります。

このように、七分間以内に、十秒間ずつ三回、漢字カードを子供に見せ、教えてやり、読ませてやることが、私の言う〝漢字遊び〟なのです。この遊びに費される時間は、わずかに三十秒に過ぎません。「何だ、こんなことか」と言いたくなるようなことです。でも、これが毎日続くと、偉大な効果を発揮

するのです。

この〝三十秒間の遊び〟を一セットとすると、一日のうちにこの遊びを五セットすることが必要です。漢字を覚えるためには、これだけしなくてもできます。しかし、記憶を確実なものにするためには、〝反復〟が必要なのです。〝反復〟すること、そのことが大切なのです。

第一セットと第二セットの間隔は、三十分以上、一時間以内が有効です。なるべくそうするように努力して下さい。第三セット以降は、三十分以上経過していれば、何時間後でも結構ですが、一日のうちに五セットしなければなりませんので、余り間をあけることはできません。

こうして、第一日目の〝漢字遊び〟は、一度に十秒間ずつ三度することを五セットしますから十秒×三×五＝一五〇秒＝二分半というわけで、二分半の時間を必要とします。念のために言いますが、五セットに至らないうちに漢字を覚えてしまって、子供が漢字を見るやいなや、「いちご」と読んでも、第五セットの最後まで、きちんと慎重にやらなければなりません。




**第二日目の漢字遊び**

第二日目のための漢字カードを用意して、それで〝漢字遊び〟をすることは、まったく第一日目のやり方と同じです。ただ、それをする前にしなければならないことがあります。それは、第一日目のカードを子供に見せて、「これなあに」とか、「このカードは何ていう字」と尋ねることです。

子供は必ず「いちご！」と迷わず読むでしょう。読んだら、「まあ、えらいわねえ。もう覚えてしまったのねえ」と言って、感心し褒めてやることが大切です。

大人だって、お世辞とわかっても、褒められればいい気分になります。子供は、褒められればいい気分になると同時に自信が湧いてきます。自信が湧けば、自然に生き生き

となって、やる気が起こり、何をしてもうまくできるようになります。

だから、子供の教育には、褒めることくらい大切なことはありません。それは、親の最も重大な仕事だと言っても決して言い過ぎではないと思います。

もし、万一読めなかったとしても、がっかりしたり、不満な顔を見せてはいけません。子供に読めないと見たら、すぐさま、その字は初めて教えるような顔で、「この字は〝いちご〟という字よ。いちご、いちご」と読んでやることです。この場合は、特に、明るい気持をかき立てるような態度で、朗らかに読んでやることが大切です。

尋ねられた漢字が読めれば得意になりますが、読めなければいい気持はしません。気持が沈めばやる気もなくなります。そうなったら学習効果は当然低くなります。だから、親が落胆したり、不機嫌な顔を見せてはなりません。

最もいけないのは、「昨日、十五回も教えてやったのよ。まだ覚えられないの」と言って責めたり、「頭が悪いのねえ」などと馬鹿にしたりすることです。このような態度は、百害あって一利もありません。厳重に慎しんで頂きたいと思います。

〝苺〟がほんとに大好きな子供だったら、二分半の漢字遊びでこの字が覚えられないことは、まずないと思います。一年間の学習で一文字のかなも覚えられなかった愛子ちゃんも、この二分半の漢字遊びで、その翌日第一回目の質問で、ちゃんと正しく読み、その後、一日一字のペースでどんどん覚えて行きました。

そうは言うものの、多くの子供の中には、覚えられない子供も当然いることでしょう。その場合には、翌日、もう一日、同じことを繰り返してやって下さい。つまり、同じ字を三十回も繰り返して読んでやることになります。

それでもまだ答えられないようでしだら、さらにもう一回だけ繰り返してみて下さい。それで四十五回やるわけですが、もし、これでも覚えられないとしたら、その原因は子供の側よりも、〝苺〟の方にあると思います。〝苺〟の代わりに、子供の関心の強いと思われる別の漢字を選んで、与えてみて下さい。

さて、前に戻って、〝苺〟が読めたら、前述のように褒めて、それから「では、今日は〝桃〟という字を教えてあげましょう」と言って、第一日の要領で第二目目の漢字を教えてやります。

つまり第二日目は「これ、何ていう漢字？　そう、いちごね。よく読めました。偉い。では今度はこの字、これは〝もも〟という字よ。もも。もも」これを十五回繰り返してやるわけです。

**第三日目以後の漢字遊び**

もう説明するまでもないと思います。第三日目は「これ何ていう字？」と尋ねるカードが二枚になります。「これなあに？そう〝いちご〟ね。よく読めました。では、これは何でしょう。そう〝もも〟ね。よく読めました。二つとも覚えましたね、えらい。では今日は、この字を教えてあげましょう」と言って三枚目のカードに移るのです。

苺が読めて桃が詰めない場合は、第二日目のつもりで、先日のことを繰り返してやります。そのやり方については、前述の通りですから、その注意通り実行して下さい。

さて、このやり方で、第四日、第五日と進めて行けばよろしいのです。第四日には、順調に行けば、「これなあに」と言って尋ねるカードが三枚になり、第五目にはそれが四枚に、第六日には五枚になります。

こうして、日が進むにつれて、質問するカードが一枚ずつ増えて行きますから、〝漢字遊び〟の時間もわずかではありますが、日ごとに増えて行きます。だから、第八日には、順調に進みますと、質問するカードが七枚になります。

そして、第八日の第五セットが終了した時点で、最初の〝苺〟という漢字は、百五回も反復して読んだことになります（15回×7）。〝反復〟は多ければ多いほど良いのですが、一応、百五回の反復で半永久的な記憶になりますので、〝卒業〟ということにして、第九日以降の質問からは削ります。

従って、質問するカードは、第二日から一枚ずつ増えていって第八日で七枚になりますが、一日ごとに増えるのはそれまでで、それ以後は、一枚増えても一枚減りますので、第九日以降はずっと七枚ということになり、一定します。

だから、七枚のカードの質問に要する時間がおよそ二十秒として、これにその日初めて学習する新しい漢字の〝漢字遊び〟の十秒を加えた三十秒が、一度の〝漢字遊び〟に費される時間の総量です。

この三十秒の遊びが一セットに三度ありますから、この時間が一分半。それを一日五セットやりますから、一日に費される〝漢字遊び〟の時間の総量は、約七分半ということになります。

**漢字遊びの原理**

手足を使えば、手足は必ず発達します。手足を使わないでいては、手足は決して発達しません。頭もそれと同じことで、頭を使えば、頭の働きは必ず良くなりますが、頭を使わないでいては、頭を良くすることは絶対にできない道理です。

ただ、足の弱い者が歩きたがらないように、頭の弱い者は、頭を使いたがりませんので、頭を良くすることがむずかしいのです。頭の弱い人は、頭を使う仕事を極力回避しようとしますから、どうしても、喜んで頭を使うように仕向ける工夫が必要です。

〝漢字遊び〟は、どんなに頭の弱い者にも、喜んで頭を使うように考えられ、仕組まれたものです。だから、どんなに頭の弱い子供でも、必ず、喜んで〝漢字遊びという学習〟に熱中します。そして、この遊びを毎日怠らずに続けて実践しているならば、弱い頭も必ず働きの良い頭になって行きます。〝漢字遊び〟の原理は、このように簡単なものですが、効果には驚くほどすばらしいものがあります。ただ、注意しなければならないことは、足の弱い者は、少し歩き過ぎただけで足を痛め、二度と歩く意欲を失ってしまうことがあるように、頭の弱い者は頭を痛めやすいので、欲を出し過ぎて〝漢字遊び〟をやり過ぎないことが肝要です。

ところが、そのことがわかっていても、早く良くしてやりたいという欲に負けて、やり過ぎて失敗することが多いのは、実に残念なことで、くれぐれも控え目にする心がけが大切です。

それと同時に、もう一つ心がけて頂きたいことは、初めは熱心で忠実にやってくれるのですが〝三日坊主〟とは言わないまでも、日ごとに熱意の薄れていくことが多いということです。『石の上にも三年』という諺の通り、三年はぜひ辛抱してほしいと思います。

### 3　愛子ちゃん、学習の足跡

さて、愛子ちゃんの家で、この〝漢字遊び〟について、やり方から注意に至るまで、よく説明してやって帰宅したのですが、間もなく次のような嬉しい手紙が届きました。

**実施第一日目の報告（七月七日）**

拝啓、昨日はいろいろと御親切にお教え下さいまして、本当に有難うございました。（中略）さっそく、本日、〝足〟を教えましたところ、午前中に二セット、午後三セット、日曜日なので私がやりました。

四セット目の時、私が〝足〟のカードを見せると、私が読むよりも先に〝あし〟と読みました。五セット目も同じで、私が言うよりも先に〝あし〟と読みますので、家内と驚いています。

一日で二字覚えることができたことを、非常に喜んでいます。毎日、どうしたものかと、夜も眠れない日が時々ありましたが、今日でそのことが吹き飛んで、元気が出てきました。

遅れているから、劣っているからと言って悲観せず、明日という日を信じて努力したいと思っています。

実は、私が訪問した七月六日までに、私の送った著書を頼りに、〝目〟と〝手〟とをすでに教えており、愛子ちゃんはこの二字が読めるようになっていたのです。しかし、七月六日の話し合いで、『書物を読んだだけでは、正しい指導の仕方はなかなか理解できない』ことがわかり、この種の本の書き方のむずかしいことを思い知らされました。

でも、一応本を読んでもらった上で説明した方が、よくわかりやすいということも感じました。ともあれ、七月七日の愛子ちゃんの漢字遊びは、第三日目の形で行なわれたわけで、しかもそれは順調に受け入れられたようです。

この手紙で特に注目して頂きたいことは、「かなは一年かかっても一字も覚えなかった愛子ちゃんが、漢字は一日で一字、確かに覚えられる」という事実です。

**実施一週間後の報告（七月十三日）**

（前略）その後の愛子の〝漢字ゲーム〟の様子を報告させて頂きます。

最初やる前は、一週間に一字でも読めるようになってくれればよい、と思っていました。ところが、先生のおっしゃる通り、毎日、一字ずつ確実に覚えて、読むようになりますので、家内ともども驚いたり喜んだりしております。

私の両親、家内の両親ともども、交通事故により脳損傷を受けて知恵遅れになっている愛子を非常に

心配してくれていますので、家での〝漢字ゲーム〟の様子を見せました。すると、愛子がすらすらと間違わずに漢字を読みますので、どうしてむずかしい漢字が読めるのか、不思議がっています。

毎日、三セットないし五セットやっていますが、今日などは、第一セットの二度目の時に、〝舟〟を「ふね」と読みました。今日までに読めるようになりました字は、〝目、手、足、耳、犬、猫、雨、鶏、舟〟の九字です。

この中で、〝耳〟と〝目〟を、最初の四日ぐらい、時々間違えましたが、現在は間違わずに読みます。毎夜、家内と、明日はどの字を教えようかと、話し合って決めるのが楽しみです。愛子もいやがらずにやっています。何だか目の前が急に明るくなったような気持で、先が楽しみになり、非常に嬉しく思っております。

ドーマンさんの本を読むまで、石井先生を知らなかったことを残念に思います。もう少し早い時期から、愛子に漢字を教えていたら、どんな変化を起こしていただろうかと、また、現在はきっと沢山の漢字が読めているだろうとかを、家内と話し合っています。（以下略）』

この手紙は、七月十三日の夜書かれたもので、私の訪問した七月六日から、ちょうど一週間後のものです。この手紙で、この一週間に、毎日一字ずつ、七字の漢字を覚え、それ以前に覚えた二字と合わせて、九字になったことが報告されています。

この学習は、〝遊び〟もしくは〝ゲーム〟の名で呼ばれているように、楽しくやれて、頭をまったく苦しめることなく自然に漢字が覚えられるものであることを、この手紙から察知して頂きたいと思います。くどいようですが、一年かかってひらがなが一字も覚えなかった愛子ちゃんが、毎日一字ずつ、七日間に七字覚えたのです。これが何よりの証拠ではないでしょうか。

幼児、とりわけ脳障害のある幼児には、楽しんでやれるような学習でなければ、とても長続きしません。一時的にどんなに効果があっても、長続きしないようでは、タカが知れています。だから、無理せず、楽しい雰囲気を保つことが、脳障害児の学習には大切なのです。

**三週間後の報告（七月二十七日）**

今日で三週間になります。その後、読むことが出来るようになりました漢字は、昨日までに全部で十

九字に増えました。〝目、手、足、耳、犬、猫、雨、鶏、舟、顔、苺、象、鳩、赤、水、猿、女、男、川〟です。

この中で、愛子の好物の〝毎〟は、最初の一回で覚えて読むようになりました。

他に、一字〝馬〟を教えようと思って、二日続けてやりましたが、読めるようになりませんでした。よく考えてみますと、メリーゴーラウンドで、おもちゃの馬をよく見ていますので、知っていると思っていたのですが、実際の馬はまだ見たことがないのに気がつき、近くの競馬場の厩舎に連れて行って、実際の馬を見せてやりました。すると、その大きいのと、初めて見たために、驚いていました。

メリーゴーラウンドは非常に好きで、〝馬〟はすぐに覚えるだろうと思ったのですが、これは今まで〝おうま〟と言ったものを、ここで急に〝うま〟と言わせるようにしたため、なかなか〝うま〟とは言えないようです。一週間たった今でも、〝うま〟とは口から出て来ません。絵本の馬の絵を食事のテーブルの横に貼って、〝うま〟と言えるように練習しています。

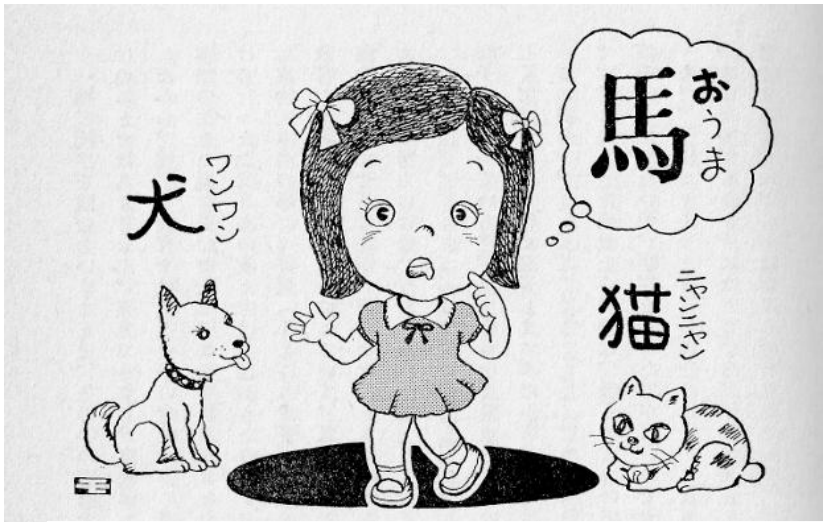
絵本の絵の所に、今まで教えてやった漢字を書き入れてやったり、ひらがなの文字板に漢字を貼りつけてやりましたら、〝鶏〟の字を見つけて、〝にわとり〟という字だと家内に見せて言っていました。

やはり頭部損傷の関係で（天候の様子にも関係があるようです）、一週間のうち、大体一日か二日は非常に頭の調子が良くて、二日くらい良くない日のあるのを感じます。しかし、毎日一字ずつ覚えていくのを、家内ともども非常に喜んでいます。

将棋のお話をお伺いしてから、早速買い求め、長男と毎日やっています。愛子は駒をますめに一つずつ並べたりして遊んでいます。

身体を丈夫にしてやることの大切さを痛切に感じましたので、夏休みに入ってから、近くのプールへ連れて行って、水に入れたり出したり、身体を干したりしています。昨年の当時と比較して、皆のやっているのを見て、すぐに真似るようになったのに気づきます。

浮き輪にとまって足をバタバタさせたり、自分で泳いだり、浮き輪の上に寝て浮いたりして遊びます。時々、近所の子供が家に遊びに来てくれますが、まだ一緒になって遊ぶことができません。しかし、一緒に遊ぶ時間も少しずつ長くなっているようには感じます。その他、感情の面の発達してきていることに気づきます。（以下略）




この手紙は、前回のものから二週間たった七月二十七日付の手紙です。つまり、実践を始めてから三週間の指導の結果が、報告されたものです。

この報告の中で、大変にいけないことをやってしまったことが報告されています。お父さんはまだそれに気づいていませんが、〝馬〟を〝うま〟と言わせようとこだわっていることです。

漢字は〝目で見る言葉〟です。だから、〝耳で聞く言葉〟と一緒に教えるのが良いのです。ところが、愛子ちゃんはすでに〝おうま〟という発音で、〝耳で聞く言葉〟を身につけていました。しかも、愛子ちゃんにとっては、馬は〝おうま〟というものであって、〝お馬〟という意識はないのです。

こういう場合は、〝馬〟は〝おうま〟でも結構なのです。もしも、それでは気がすまないというのなら、カードの方を〝お馬〟と改めるべきです。いずれにしても、〝うま〟と言わせようと固執することは間違いです。もっと幼い子でしたら、〝犬〟は〝ワンワン〟〝猫〟は〝ニャンニャン〟でも良いのです。

一体、漢字を読むということは、その字の意味することを理解することであって、単に発音するだけのことではありません。発音できても、意味がわからなかったら、何にもならないのです。

だから、漢字の教育では、その字の意味内容の理解を重視して、例えば〝馬〟という字だったら、本当の生きた馬を見せた上で、これを教えることが大切なのです。この点では競馬場の厩舎まで出掛けて行ったお父さんの教え方は、良かったのですが……。

〝実物（本当の馬）〟〝言葉（うま）〟〝漢字（馬）〟この三つを頭の中で結合させることが、石井式漢字教育では特に重視することにしていて、私の著者では、このことがいつも強調されています。しかし、実物を体験させることが大切だとは言うものの、これにはなかなか努力のいることで、愛子ちゃんのお父さんの努力には心を打たれました。

もう一度、〝おうま〟の問題に戻りますが、漢字の読み（発音）とは〝言葉〟のことですから、現在子供の使っている言葉以上のものを要求してはいけません。例えば、幼児にはサ行の発音がむずかしくて、これをタ行で発音します。だから、汽車は〝キシャ〟と言えなくて〝キチャ〟になります。

この場合、「キチャではなくてキシャだよ。さ、キシャと言ってごらん」と子供に要求してもだめです。このような発音上の問題は、ほうっておいても発音能力が向上すれば、自然に改まりますから、直そうと 思わないで、時期を待った方が良いのです。

ただ、子供がキチャと言うのに合わせて、大人がよくキチャという言い方をしますが、これではいつまでたってもキシャになりません。子供の発音を直す必要はありませんが、大人はいつも正しい発音をするように、心がけなければなりません。

例えば、子供が〝汽車〟をキチャと読んだら、「そう、この字はキシャだね。よく読めたね」と言って、これを認める一方で、正しい発音を聞かせることが大切です。だから、〝馬〟をオウマと言ったら、「そう、この字はウマという字だね。よく読めたね」と言っていれば良いのです。そのうちに必ずひとりでに直ります。

将棋の話が出ていますが、これは愛子ちゃんの家を初めて訪問した時、手先、特に指先を使う仕事や遊びの大切さを奨めたことがありましたが、将棋はその一つだったのです。

ます目に一つずつきちんと並べること。並べた将棋を人指し指を使って立てること。また、振り将棋といって、金将四枚を振り投げて遊ぶ遊び方など、楽しく遊べて、その間に指の働きを巧みに、かつ敏感にさせることをねらった遊びを教えてやりました。

頭の働きは、頭を使うことによって活発になるものですから、頭を使わせるように仕向けることが大切であることは勿論ですが、何と言っても身体が丈夫でないことには、頭を使おうという意欲が生まれません。そこで、頭を使わせること以上に、まず身体を丈夫にすることの重要性を説きました。プールでの水遊びの報告は、そういうことでなされているのです。

便りの最後に「感情の面の発達してきていることに気づきます」と書かれてあります。この点に御注意頂きたいと思います。幼児が漢字を覚えますと、急に幼児が人間らしくなることをこの教育に従っている方は、どなたも指摘します。

知性と感情（情操）とは別個に独立して発達していくものではなくて、互いに関係し合い、影響し合

って発達していくものでしょう。そして、知性も感情も、言葉によって豊かになり、発達するものですから、漢字教育が知性を育てるばかりでなく、感情を豊かにするのは当然のことなのです。

よく、「幼児期は情緒を豊かにする時期だから、漢字のような知育は控えるべきだ」という意見を聞きますが、そういう意見はこの事実から考えてみて、誤っていることがよくおわかり頂けると思います。

**四十日後の報告（八月十七日）**

早いもので、四十日が過ぎました。その後、お借り致しましたアスクミーをやらせておりますが、やはり愛子には興味がとぼしいらしくて、一人遊びでの学習はむずかしく、今しばらくの時間が必要のようです。

ひばりの声のカードは面白いらしく、好んでアスクミーに入れますが、漢字カードは三、四枚だけで、それ以上はどうしても入れようとしません。

また、聞き慣れぬのか、言葉を聞き取り違うことがあります。長男がカードを差し込んで遊びますので、愛子も興味を示してやるようにならぬものかと、折を見ては一緒にやらせております。（中略）

レコードのお話も、現在の愛子の力ではまだまだむずかしいらしく、部分的にはある程度理解できるようですが、話の流れは理解できないようです。しかし、繰り返し聞かせてはおります。

次に、漢字ゲームの事ですが、最初は毎日一日一字のペースで進んでいたものが、三週目ごろから、少しずつ忘れが目立ち、確実に読めるようになってから、新しい漢字を提出するようにしているのですが、朝から二、三セットはすらすらと読んでいたのに、四セット目になるとどうしてか、七字のうち三字ほど忘れて読めないことがあります。それで、三日かかっても七字全部が読めるようになってから、次の新しい漢字を加えて進めるようにしています。

ところが、次週前半、非常にスムーズに一字ずつ覚えて、朝からすらすらと読めていたのが、その日の五セット目になると、七字のうち四字も読めなくなります。それまではすらすらと読めていたものが、急に 読めなくなるのはどうしてでしょうか。不思議でなりません。

それから繰り返して二日教えましたが、いくら教えても読めませんので、読めなくなった漢字をはずして、改めて一字ずつゲームに取り入れて教えていくことにして、ようやく全部読めるようになりました。（中略）

ゲームを始めてから四十日間で、今まで教えた字は全部で三十字になります。これを、カルタ取りのように、こちらで読んで取らせますと、二十五、六枚は取ります。ところが、これを読ませてみますと、読めるのは二十二、三字です。

今、ゲームをしている七字でも、読んで取らせれば七枚とも取りますが、読ませますと、一字か二字、読めないことが時々あります。

現在までに教えた字は次の通りです。

目、手、足、耳、犬、猫、雨、鶏、舟、顔、苺、象、鳩、赤、水、猿、女、男、川、着物、自動車、馬、先生、豆、糸、石、頭、飛行機、黒、電車。（以下略）

この手紙は八月十七日付で、この指導を始めて四十日目のものです。ここでアスクミーというのは、リーダーズダイジェスト社が製作した、私の監修になる『楽しい漢字』の教育機器の名前です。

これは、録音された漢字カードを、このアスクミーに差し込みますと、この機器がその漢字を読んでくれるようになっていますので、一人で学習できます。それで、ご両親の手が少しでも省けるようにと思いましたので、七月二十七日、関西方面へ行く途中、プラットホームまでお父さんに来てもらって、停車中に手渡したものです。

この機器は、子供にもよりますが、親が読んでやるよりも興味を持って漢字に取り組みますので、非常に効果があります。幼児開発協会理事長の井深大氏は、〝機械が先生に勝った〟という書物で、この機器学習が先生の指導による学習効果よりも高かった、ということを述べていますが、それは事実です。

子供は一般に繰り返しが好きですが、大人はそれが苦手で、なかなか子供の相手がしきれません。そこで、それを決していやがることのない機械にやらせよう、ということで考案したものです。

ところが、愛子ちゃんの場合は成功しませんでした。それは、多くの子供が喜んでするカードの差し込みを、愛子ちゃんは少しも喜ばないからです。その原因は、愛子ちゃんの聴力が低いせいではないかと思います。

「聞き慣れぬのか、言葉を聞き取り違うことがあります」というのも、実は聴力の低いことを物語っているのだと思います。だから、機器から流れ出る〝言葉〟が、よく聴き取れなくて、興味を感じないのだと思います。

元来、機器は音声を発するだけで、口の形が示されませんので、いわゆる〝口まね〟ができにくいのです。その上、聴覚に障害があってその能力が低ければ、いよいよまねがしにくくなります。

だから、愛子ちゃんの場合は、初めての漢字は、どうしても親が直接口の動きを見せながら読んで聞かせる必要があります。そして、その漢字が覚えられた後に、その漢字のカードを与えて、アスクミーに掛けさせるようにしたら、喜んで機器を使うようになったのではないかと思います。

一般的に言えば、脳障害児は、聴力も普通児より劣っていると考えなければなりません。だから、漢字を読んで教えてやる場合、口を大きくはっきり動かして、普通より強い声で発音することが必要です。

そうでないと、個々の発音の違いがはっきりと区別できず、従って、それを覚えることができません。発音がよくわからず、それが覚えられないから、そういう学習に興味を感じないのだと思います。

聴力器官も、それを多く使うことによって発達するものですから、愛子ちゃんのように聞くことに興味を感じないようでは、聴力がいよいよ貧弱になります。聴力が弱いから聞きたがらない。聞きたがらないから聴力が発達しない。この悪循環を、どこかでどうしても断ち切らなければいけません。

**頭に適度な休養を与えながら……**

さて、この手紙で最も重要なことは、「午前中は覚えていて読めたものが、午後になると、それも遅くなればなるほど読めなくなる」ということです。お父さんは、そのことを「不思議です」と語っていますが、それは少しも不思議なことではありません。

読むことは、脳の働きによる仕事ですから、頭が疲れてくると、ひとりでにその活動を停止して休養するようになっています。脳は最も重要な部分であり、しかも他の細胞とは違って、過労で脳細胞が死んでしまうと新陳代謝ができないものですから、それを守るために脳は、活動を〝停止〟するように作られているわけです。

正常でもそうであり、ことに愛子ちゃんの悩は、障害部分をかかえながら、懸命に働いています。例えて言えば、脳は電話の配線のようなもので、普通ならストレートにつながるところを、障害部分を迂回しながら正常な部分がカバーしているのです。それだけに疲れ易いのです。

だから、午前中は元気よく働いている脳も、午後になると疲れて活動しなくなるのです。目が漢字を見ているようでも、実は漢字を見てはいないのです。

だから、読まないのであって、決して読めなくなったのではありません。勿論、忘れたのでもありません。

頭が休養を必要とする状態になって、その活動を停止しているのですから、こういう時には〝漢字遊び〟に限らず、頭を使う仕事は即刻中止しなければいけません。頭を休養させて、疲れをなおすことが必要です。

そこがむずかしいことですが、頭は使うことによってのみ発達するものですから、できるだけ使わなければいけません。そうかと言って過労を押して頭を使うことも、望ましいものとは言えません。

疲れれば休ませ、休んで回復したらまた使う、というようにすることが必要です。

こうしていますと、頭の働きが良くなりますから、長時間にわたって頭が活動できるようになり、また、過労にも耐えられるようになっていきます。しかし、くれぐれも早く良い頭にしようとあせってはなりません。俗に〝せいては事をし損ずる〟と言いますし、〝急がば回れ〟という諺もあります。

**理解することと、表現すること**

次に問題なのは、「読んで取らせると取れるものが、読ませると読めない」ということです。これも実は極めて当たり前のことでして、それは理解力と表現力との差によるものです。

〝読む〟ということは、実生活では〝理解〟することを意味していますが、〝読ませ〟て読む場合の〝読む〟は、〝表現〟を意味しています。私たちは、子供がある漢字を〝理解〟しているかどうかを知るには、〝表現〟としての〝読む〟行為を通して知るのが一番手っ取り早いものですから、たいてい読ませています。

その場合、子供が読めば、無論〝理解〟していることがわかりますが、それは正しく言えば〝理解をした上での表現〟なのです。本当の〝理解〟には、〝表現〟できる場合もあれば、できない場合もあるのです。

だから、「〝表現できない（読めない）〟から〝理解〟できていない」とは言えないのです。無論、理解できていないから読めない、ということもありますが、「理解できていても読めない」ことだって大いにあり得ることなのです。その場合、「読んで取らせると取れるが、読ませると読めない」という

ことになるのです。

一般には「漢字は読むためにある」と考えられますが、その〝読む〟は〝理解〟であって、〝表現〟ではありません。つまり、発音できなくても（読めなくても）、その意味が〝理解〟できれば用は足りるのであって、それが実生活における〝読む〟行為です。

だから、「読んで取らせると取れる」ならば、〝理解〟できているわけですから、〝読めた〟として学習を進めるべきです。そこで足踏みをして」ところへと発展していきます。

**三か月後の報告（十月七日）**

（前略）漢字ゲームを始めてから、ちょうど三か月を経過した現在、約五十字の漢字が読めるようになり、（注、参考までに言いますと、小学校で一年間に学習する漢字の数が二百字を越える学年はありません。つまり、三か月間に五十字以上の漢字を学習させることはないのです）よくこんなに覚えたものだと、家内と話し合っています。

八月末に、長男が盲腸で入院して、付き添いのため、約二週間くらいまったくできなかったので、実際は、二か月半で五十字の漢字を覚えたことになります。

（中略）

夜、風呂に入る前に、気分の良い日にはカルタ取りの形式で取らせていますが、自分から進んで、「ゲームをやろう」と言う日が増えてきて、喜んでいます。

昨日は、おばあちゃんと風呂に入って、タオルの字を読んだ、ということで、おばあちゃんも大喜びでした。長男の入院中、病院のエレベーターの中で、愛子が〝電話〟という字を見つけ、「お父さん、電話と書いてある」と言ったり、朝、新聞を読んでいると、知っている漢字を見つけて読むこともあります。

テレビも、時間は短いですが、長男と一緒に、笑いながら見ていることがあるようになってきました。



先生の〝赤いろうそく〟（『楽しい漢字』の中の本の一冊で、文章はレコードで聞くこともできるようになっている）のお話は、まだ内容がわからないようですが、引き続いて、テープに吹き込んで、時折聞かせております。

アスクミーは、少しずつ興味が出てきており、遊ぶようになってきています。（中略）

最近、漢字を覚えるペースがやや遅くなってきています。また、友達との遊びの様子を見ていますと、やはりまだまだ友達の中に混じって一緒に遊べません。早くお友達と一緒に遊べるようになってくれたらと思っています。（中略）

話が思うようにできず、従って話が通じないので、友達との接触がうまくできないこと、仲間として入っても、仲間にされないことなどで、自分の思うようにならないため、砂をかけたり、かけられたり、石を投げたりすることもあるようです。（中略）

最近、夕食時に、愛子がペチャクチャといろいろ言うようになってきて、明るくなっていることを喜んでいます。長男の小学校での話を聞いて相手になったり、話の中で「何？ 何？」とばかり言っていたのが、今では「どうしたの？」「どうなったの？」「どうやった？」等の言葉が出るようになってきています。

以上のように、漢字ゲームのおかげで、順次、頭も少しずつしっかりして来ているのを喜んでいますが、昨日、幼稚園を訪れて、同年齢の子供たちを見ておりますと、愛子は、確かに進歩成長してきてはいるのですが、他の友達との差が、だんだんと大きくなっているように感じます。

先生、このように良くなってくれますと、また欲が出て、もっと良くなってほしい、と思う親心ですが、今後、愛子に対する学習方法は、同じやり方で続けて行けば、よろしいのでしょうか。ほかに学習させることなど、先生のお気づきになられます点を、よろしく御指導下さいますよう、お願い申し上げます。

漢字ゲームを始めてちょうど三か月、五歳八か月になった愛子ちゃんの現状が、詳しく書かれています。私はこれを読んで、この三か月の進歩は実にすばらしかった、と思います。足の弱い者は、どんなにがんばっても、丈夫な者より遅れます。同じように、頭の弱い者の進歩は、健全な者の進歩に比べますと、残念ですがとてもかないません。

けれども、がんばっていれば、だんだん強くなっていくのですから、そして人生は長いのですから、休まず努力することが大切です。まだまだいくら努力しても差が広がりますが、やがて、差をつめることが必ずできます。

さて、手紙を読んでまず感じることは、何よりも知的関心が高まり、意欲的、積極的に行動するようになってきたことがわかり、実にすばらしい進歩だと思いました。「砂をかけたり、石を投げたり」する行為の是非はさて置き、愛子ちゃんの成長の過程としてこれを眺める時、私は「しめた」と喜ばずにはいられません。なぜなら、それは愛子ちゃんに成長発展の強い原動力が備わっている証拠だからです。

知能は、頭を現実に使うことによって向上するものですが、同じ使うのでも、受動的な使い方ではタカが知れています。何よりも、本人が知的な関心を持ち、意欲的、積極的に行動することが大切です。その点、愛子ちゃんの現状は、まことに好ましい状態になってきています。

だから、「最近ペースが遅くなってきている」とお父さんは心配していますが、成長のペースというものは、速い時あり、遅い時あり、で、決して一様ではなく、速いから良い、遅いから悪い、というものではないのです。

よく〝尺取り虫〟にたとえられるように、伸びたり縮んだりして進む、と考えたら良いと思います。友達と比較すると、次第に差が開く時期もあれば、逆に、差を縮める時期もあるのですから。それに、今は差が開く時期なのですから、友達との比較をせずに、マイペースで、毎日、毎日を怠りなく努力することが肝要かと思います。

私は、この返事を八項目に分けて書きましたが、その第七項目に 次のように書きました。

「夕食後、愛子ちゃんが積極的に話すようになったことは実に良い徴候です。その場合にはぜひ喜んで相槌を打ち、熱心に相手になってやって下さい。これは最も有効な治療法になるでしょう。

『どうしたの?』『どうなったの?』という質問の出始めたことも、これも実にすばらしいことです。質問には何を差し置いても答えてやることが大切です。(忙しい時でもいやな顔をせず、にこやかな表情で)

愛子ちゃんの話す言葉が不完全であってもそれをその場で正そうとしてはいけません。そうしたら、せっかく、積極的に話し始めた愛子ちゃんが、話をしない愛子ちゃんに逆戻りしてしまいます。

どうするのが良いかと言いますと、例えば『お父たん、あっち、行った』と言ったとしましょう。その時に、『〃お父たん〃ではなくて〃お父さん〃よ。さあ、〃お父さん〃と言ってごらん』と言うのは最もまずい指導です。

『そう。お父さんが、あっちへ行ったの』という風に、復唱するような形で、しかも正しい言い方で受け答えをしてやることです。こうして、正しい言い方をたびたび耳に聞かせていれば、いつかは自然と正しい言い方をするようになります。

そして最後に、

「確かに悲観的な材料はまだまだ多いでしょうが、五十字の漢字が読めるということは、実にすばらしいことではありませんか。愛子ちゃんよりも一つ年上の一年生だって、二年生になるまでの一年間に、七十六字の漢字しか学習しないのです。だから一年生だって、愛子ちゃんほど漢字の読める子は、今はまだ一人もいないはずです。できる限り明るい面を見て、希望をもって努力して下さい。」

と、力づけて文を結びました。

## 十月二十一日の手紙

（前略）先日の愛子の運動会の様子をお知らせ申し上げます。長男の小学校の運動会で、来年就学する子供たちのかけっこがあり、愛子も参加させましたら、他の友達と同じように小学校の先生に引率されて、入場門より整列して並んで入り、自分の順番の来るまで、落ち着いて先生の指示に従い、座って待ちました。（昨年は、友達と同じように座って待っていることができませんでした）。

かけっこはびりから二番目でしたが、同じようにやれたことが嬉しくてたまらない様子で、先生から賞品の鉛筆と風船を頂いて、にこにこ顔で戻って来たので、「上手にやれたね」と褒めてやると、賞品を見せて、最近見せたこともないような笑顔で、とても嬉しそうでした。

心配してきた日々、雨の日に傘をさして保育室の愛子の様子を、涙を流しながら外からそっと見ていた昨年のこと、何とか回復の手がかりをと、各地の学校や施設を訪ねた思い出、方々の医師を訪ねたことなど、数々の思い出が頭に浮かび、どうにか他の子と同じにやれたこと、最後まで落ち着いて先生の指示に従っておれたこと、最後の整列のわが子を見ていて、目頭が熱くなり、胸がジーンとして嬉しくてたまらず、つい涙が出てしまいました。

この喜びは、上手に手紙に書くことができません。これもひとえに温かいご親切なご指導の賜物（たまもの）と、深く感謝しております。

つい先日も、耳鼻科で医師の治療を受けましたが、前（九月ごろ）には、看護婦さんと私と、二人がかりでないと、治療が受けられなかったのですが、大きくなったから一人でやってもらうよう言い聞かせ、私は廊下で待っていましたら、じっと我慢して一人でやってもらうことができました。聞き分けもでき、少しずつ落ち着いてきているのを、非常に嬉しく思います。

この手紙は、前の手紙から半月後、愛子ちゃんが友達と同じように、立派に運動会に参加できた喜びを知らせてよこしたものです。

運動会に一人で参加できたばかりでなく、つい先月まで、二人がかりでなければ、病院で治療が受けられなかったのに、これまた立派に一人で治療が受けられるようになった、その喜びが手に取るようにわかります。

漢字によって高められた知能が、感情的にも情操的にも安定観を生み育て、漢字が読めるという自信が、運動会でも立派に一人で行動できるようにしたのだと思います。その精神面における成長の著しさに驚くとともに、とても嬉しく思いました。

**昭和五十一年三月七日の手紙**

（前略）漢字ゲームも今日でちょうど三百字になりました。ほとんど毎日、覚えた漢字を全部、楽しく復習させております。一枚一枚読ませますと、約二十字くらい読めない字があります。けれども、読んで取らせますと、読めなかった字も、ほとんど間違えずに取ります。

平がなは、全部、濁音、半濁音を含めて、読み書きともにできるようになりました。けれども単語だと書きますが、まだ文を書き表わすことができません。

短い文は、読んで理解できるようになってきています。漢字の書き方は、平がなを先に教えたため、この二月から始めたばかりで、今日現在、十五字を書きます。

先生から頂いた〝赤ずきん〟の絵本、あれからほとんど毎日読んで聞かせております。最初は話の内容がよく理解できていなかったようですが、毎日読んでやっているうちにわかるようになり、二度三度

と要求してくる日もあり、私の方が参ってしまうことがありました。

今では暗記してしまった部分もあります。また、話を聞いて、自分で疑問に思うことを質問できるようになりました。

例えば、この話にはお父さんが登場しませんので「赤ずきんのお父さんはどうしているの」と尋ねたり、初めのページで、お婆さんが眼鏡を掛けているのに、狼の腹から出て来たお婆さんが眼鏡を掛けていないのを発見して、「お婆さんが眼鏡を掛けていないが、どうしたの」などと尋ねます。

アスクミーは、一人で遊んでいる間に、現在では七割弱は覚えて、読めるようになっています。〝二人の小人（『注 楽しい漢字』の中の絵本の一冊）のレコードも、大体話の筋が理解できるようになりました。〝歌（『楽しい漢字』の中の絵本の一冊）のレコードは、特に大好きです。絵本の漢字混じりの文の歌詞を読ませ始めてみようかと思いますが、どうでしょうか。

絵を描くことは余り好きではないようです。ただ色々な色を使って、ます目をきれいに塗りつぶすことが好きです。人の顔や身体などの絵は、下手ながら描きます。

平がなが書け、漢字も書けるようになってきたのに、絵を描きたがらないのが不思議です。発達の過程の途中が抜けてしまったためでしょうか。少しずつ描く力をつけてやりたいと思いますが、その指導法をお願いします。

話す力は、徐々に、少しずつながら進歩していますが、遅々としていて、普通の子と、その差は開くばかりです。けれども、学校の、一日の様子を、大体間違いなく、たどたどしいが考えて（思い出して）話すことができるようになってきています。

（話したことを学校の連絡帳に書き、担任の先生に尋ねてみますと、事実を正しく伝えているようです）

算数は、1から20までを読み書きでき、大小もわかります。数の順序で、次の数は正しく答えますが、前の数はまだしっかりと言えません。足し算は少しずつ理解できるようになってきたところで、ある数に1を足すことはできるようになりました。

学校の様子は、昨日朝から一日、愛子の様子を見て来ましたが、落ち着いて来て、同年齢の他の子、一、二を除く上級の子よりも安定感が感じられ、嬉しく思いました。

ただ、知的教育が少なく、系統立てた各教科の教育も少なく、残念に思いました。私は、普通教室以

上に各教科の教育の必要性を感じていますが、教室の現状では、一年生から六年生までの子がいるため、できないのが現実です。

学習しようという意欲のある子は、愛子を含めて二、三人で、他はないように感じます。愛子は、体育と図工の時間だけ、普通教室へ行きます。体育は、体力がついてきて、できないながらも、同じように一時間を過ごせるようになっておりますが、図工は、能力的にもまだ問題が多く、同じようにできないことが多くて、先生に手伝って頂いて、どうにかやっています。

特殊教室の担任の先生の話では、現在の力は（現在七歳一か月）四歳から五歳くらいだそうです。ただ、文字の読み書き能力は、石井先生の御指導のお陰で、ずっと上のレベルです。

教育を上手にしてやれば、少しずつでも進歩発達できるのが、どうも今の教育では、なかなか進歩は少ないです。先生は一所懸命やっておられるのですが、どう教えるかがむずかしいようです。

知的な面、文字の読み書き、数の力は、ほとんど家で覚えたもので、学校での学習は少なく吸収してきたものは極めて少ないように思います。

早いもので、四月になったら、普通学級の一年に入れる方が良いか、特殊の二年に進級させるべきか、色々家内と思案しております。

特殊の担任の先生は、普通学級よりも特殊教室を奨められているのですが、教室の現状を見る時、迷います。思い切って普通教室の新一年生に入れてみたい気持はあるのですが、新一年生より劣る面が多いことに気づき、果たして同じようにやれるだろうか。本人の負担が多くなり、学校嫌いになっては、と思ったりします。

先生の話を聞く力、話す力等、新一年生の子と比べてまだまだ劣りますので、どちらにしたら良いだろうかと、いろいろ家内と話し合っている今日このごろです。どうしてやるのが良いか、先生の御指導をお願いします。

また、これからの家庭学習面に、参考になる本とか、漢字やかなの実用性を高めるための、今後の指導法、漢字の書き方、愛子に役立つ本、教材等敢えて下さい。（以下略）

この手紙は、〝漢字ゲーム〟を始めた日からちょうど一年八か月たった昭和五十一年三月七日付けの手紙です。前の手紙との間に、何通かの手紙があるわけですが、紛失して手元にありません。昭和五十

年代の手紙が一通も手元にありませんが、五十年の四月、特殊教室に入れるべきか、普通教室に入れるべきかの相談を受け、それに返事を書いた記憶は、今も鮮かに残っています。

そうして一年を特殊教室で過ごしましたが、進級時期の今また、その問題で悩み、その相談を含めて愛子ちゃんの現状を報告してくれたものです。手元にその折の返事のコピーがありましたので、それをそのまま掲載します。

**愛子ちゃんのお父さんへ**

拝復、お便り嬉しく拝見しました。実にすばらしい進歩だと思いました。お父さんが参ってしまうくらい、繰り返し読んでもらいたいという愛子ちゃんの気持、これは進歩の原動力です。希望にこたえて、何回でもぜひ繰り返して読んでやって下さい。

質問もすばらしいことです。質問を通して会話をやり取りすることが、これまた進歩のためのもう一つの原動力です。質問という機会を大切に生かしてほしいと思います。

歌詞を読ませたらどうかとの御質問。無論結構です。しかし、やってみて愛子ちゃんが余り喜ばないようでしたら、無理強いしないで、途中でもよいからやめて下さい。喜んですることや進んですることは、何であっても頭が生き生きと活動するので、頭の働きを良くする効果があります。やってみたいと思うことがあったら、恐れず、迷わずやってみることです。やってみて、子供が少しも喜ばなかったり、効果がないようだったら、そこで直ちにやめれば良いのです。

絵は、描きたがらなければ、描きたくなって描くまで待つことです。喜んで描かないからと言って、心配することは少しもありません。描いた絵は、下手でも褒めてやりますと、嬉しいものですから、進んで描くようになるかも知れません。反対に、けなしたり、良くしようと思って直してやったりするこ



とは、気分を害しますから、描こうとする気持を失わせる恐れがあります。下手でも感心して見てやることが大切です。

話す力は、話すことによって上達するものですから、話す意欲が出てきさえすれば、下手でも少しも心配することはありません。必ず上達します。だから楽しんで話せるような雰囲気作りに気を配ってやれば、それ以上のことは心配せずに、良い話し相手になってやることです。

今の特殊教育に満足できないお気持は良くわかります。教育方法をよく知らないというよりも、基本的な考え方に誤りがあるから、学習効果が上がらないのです。しかし、それは「知的な教育は家でやればよいのだ」という覚悟をすれば、決して心配することはないと思います。

今の学校教育は、普通学級でも、〝七五三教育〟と言われていて、初めは学習についていけない子供が三割ほどいて、それがやがて五割に増え、卒業する頃には七割になってしまう、というのです。

普通学級で学習しても、学業がほんとに消化できる子供は三割で、あとの七割が落伍するというのでは、せっかく普通学級へやっても、学業が進むという保証はまったくない訳で、かえって心配です。

ですから、余り普通学級に期待を寄せることには、私は賛成できません。学校には何よりも楽しんで通えることが大事です。楽しんで学校生活を送っている限りは、意欲がふくらんでいくことでしょう。意欲さえ育てば必ず進歩します。

今のままで、お父さんが愛子ちゃんの相手になってやっていれば、六年生になる頃には、普通児の大部分の子供たちと比べて、決してひけを取らない力を持った子になると、私は確信しています。

なるほど現在は、愛子ちゃんの進歩のペースは、普通児に比べて確かに低いでしょう。しかし、着実に進歩して行っていますから、普通児の多くは今でこそ、ハイペースで進んでいますが、落伍が多くなる六年生ごろには追いつき、その後は逆に追い越せる可能性が十分にある。私はそう思っています。

人生は、一生涯をかけたマラソンのようなものです。レースはまだ始まったばかりです。あせってはいけません。急いで逆転する必要はないはずです。決勝まで今のペースで走ったら、逆転は間違いなくできます。

ヨーロッパ旅行を数日後にひかえ、しかもそれまでに済ませなければならない仕事をかかえていて、十分な返事ができません。帰国後に、ゆっくりと時間をかけた返事をしたいと思います。取り急ぎ右

**昭和五十一年七月三十一日の手紙**

拝啓、早いもので、先生の御親切な御指導を賜るようになって、三年目の夏が来ました。愛子もその後、色々な面に徐々にしっかりしてきた今日このごろ、家内共々喜び感謝しております。ありがとうございます。

さて、愛子の現況をお知らせしますので、またお手数を煩わずらわしますが、よろしく御指導をお願い申し上げます。

(1)〝漢字ゲーム〟は、今日現在で三百六十七枚になります。一枚々々読ませてみますと、一割くらい読み違えたり読めないカードがありますが、他は正しく読みます。読んでカルタ取りのように取らせますと、ほとんど取ります。

新しい単語を、順次、ゲームに入る前に教えて、言葉として使えるようになったものから、ゲームに入れてやっています。毎日、欠かさずに、親子ともどもがんばって行なっています。

文の読み方は、漢字かな混じりの短文であれば理解できるのですが、少し長文になりますと、読むことは読めるのですが、文を理解する力がまだまだです。文が読めるようになった現在、文を理解する力をつけるためには、どのような指導を行なってやったらよろしいでしょうか。教材があれば、送って頂けましたら幸いです。

(2) 書く力は、毎日欠かさず、二ページずつ練習させています。手の運動が、次第によく動くようになってきたように思います。

平がなの単語は、大体書けるようになっておりますが、文として書き表わすことは、まだ上手にできません。漢字は、一年の国語の『上』の本の字は、全部書けるようになってきました。文を書く力をつける指導方法と、美しい字を書かせるための教材等がありましたら、お願い申し上げます。

(3) 算数。四月から長男が通っている〝公文式数学教室〟に、愛子も一緒に行きたいと言いますので、何か学んでくるだろうと思って行かせております。毎週、月、金の各一時間、幼稚園児から中三の子供までが学んでいる教室です。ようやく10.までの足し算が出来るようになってきました。

(4) 聞く、話す力は、徐々に進歩はしているものの、まだまだの感がします。しかし、学校であったことを、家で思い出して話ができるようになり、口数も多くなってきたので喜んでいます。

(5) 図画。漢字も平がなも上手に書けるまでに手先の力がしっかりしてきたのに、なぜか絵は上手に

描けません。現在、興味、関心を引き超こすように努力しておりますが、何か良い指導方法はないでしょうか。

(6) 体力は、毎日の登下校の往復五キロの徒歩で、体力がついたように思っています。病気することもほとんどなくなり、非常に元気で す。

(7) 学校は、社会性をつけることでは良いものの、知的面の学習が少なく、主として、ＮＨＫの教育テレビを見ている時間が多いようです。一年下の、現在一年生の普通教室に入り、同じ仲間としてやれないかと、担任の先生と話し合っているのですが、まだまだいろいろな面で力不足のようです。早い機会に、普通教室の仲間に入れるようにしてやりたい、と思っていますが……。

しかし、この一年の間に、いろいろなことができるようになってきたのを喜んでおります。

(8) 学校の一年、二年の通知表のコピーを同封しますので、先生が見られての今後の指導のポイントなど、お感じになられたことをお教え願います。また、二年の通知表の、性格・行動の特記事項の点は、家庭でどうしてやるのがよろしいでしょうか。

以上、御多忙のところ恐縮ですが、よろしく御指導をお願い申し上げます。敬具

**あせりは「百害あって一利なし」**

この手紙に対する返事は、そのコピーがありませんので、はっきりしたことはわかりませんが、各項ごとに書いた内容のおよそは思い出すことができます。けれども、それはさて置いて今、この原稿を書きながら思いますことは、「障害児教育は、むずかしいと思う以上にむずかしいものだなあ」という歎きに似た思いです。

能力が低いものですから、練習させること自体が大変な上に、同じ練習をしても、普通児に比べ、その効果が歯がゆくなるほど遅く、情けないほど小さいので、親としては、あせってはいけないと思いつつも、ついあせってしまうのだと思います。

愛子ちゃんのお父さんには、「あせることは百害あって一利もない。決してあせらないように」と度々忠告しており、お父さんもそのことはよく了解しているはずです。

それなのに、いつの手紙でも、普通児と比較しては、その進歩の遅いということを歎いています。それは親として、まことに無理もないことだと思います。しかし、親は、絶対に歎いてはならないのです。

子供の進歩の遅く小さいのを、親が不満に思い、歎いていますと、子供にそれが必ず伝わります。以

心伝心と言いますか、親の歎きが子供にわかるのです。そうなると、子供の心も必ず沈み、活動力が衰え、意欲が薄れますので、進歩はいよいよ遅くなります。

それで、ドーマン博士は次のように教えています。

鉄棒に一秒間とぶら下がることのできない障害児がいたとしましょう。この子供が、訓練のために鉄棒にぶら下がることになりました。彼は 歯をくいしばってがんばりましたが、わずか一秒しか耐えられませんでした。

さて、この子供に対して、二通りの評価の仕方が考えられます。その一つは、「たった一秒間しかぶら下がっていられなかったの。だめねえ。今度はもっとがんばるのよ」という言い方です。

他の一つは、「まあ、一秒間もぶら下がっていられたの、えらいわねえ。あなたのような身体で、一秒間も鉄棒にぶら下がっていられる子供が他にいるなんて、とても考えることができないわ」という言い方です。

**褒めることは進歩の原動力**

前者のような言い方をされた子供は、たいてい悲観し、萎縮し、意欲を失って、母親の激励にもかかわらず、再度の鉄棒への挑戦は失敗するか、回避するか。そのいずれかに終わってしまうでしょう。

それに反して、後者のような言い方をされた子供は、自分の努力の結果に満足することができ、同時に、次にはもっとがんばって、うまくやってみせるぞ、と大いに意欲を燃やすことでしょう。

ドーマン博士は、そのような趣旨のことを述べて、親は後者のような考え方で、子供に接しなければいけない、と忠告しています。

子供が、自分自身に不満を感ずるだけならば、それは進歩の原動力になるかも知れないので良いのですが、親がわが子に不満を感ずるのは、子供の進歩の原動力になるわけがありません。それに、ドーマン博士が指摘しているように、親の意図とは逆に子供を萎縮させ、やる気を失わせてしまう恐れが大いにあるのです。

母親の悲観的な言葉は、

「僕は、失敗することが初めからわかっていたんだ。僕って、お母さんが言う通り、だめな人間なん

だ。いくらがんばったって、うまくできないんだ」

子供にこう思わせることになるのです。子供の向上を望むが故に口にした言葉ですが、結果は逆に作用するのです。

それに引き換え希望的、賞讃的な言葉は、「僕は失敗だと思ったんだが、お母さんがあんなに褒めてくれて、喜んでくれているんだから失敗ではなくて、成功なんだな。ああ良かった。だけど、今度はもっとうんとがんばって、きっとあれ以上うまくやって見せるぞ」

と、子供にそう思わせるに違いありません。

母親の賞讃的、希望的な言葉は、このように子供に満足感を与えますが、子供は決してそれに〝満足し切る〟ことはありません。子供というものは一旦、満足感を味わいますと、さらに高い所を望んで、いよいよ意欲を燃やすものなのです。

満足し切った人間には、確かに向上はありませんが、不満がいっぱいの人間にも、やはり向上がないものです。その証拠に、だめな人間と自他ともに認めるような人間に、良くなったためしはないでしょう。不満がいっぱいでは、それを良くしようという気持よりも、諦めの気持の方が先に立って、いわば自暴自棄の状態に陥り易いからです。

それに引き換えて、満足した人間は、心が安定しますので、ゆとりが生じ、欠点を冷静に反省し、向上の意欲も旺盛になります。だから、満足はしても満足し切ることはないものです。

ことに、子供というものは、本質的に〝満足し切る〟ことを嫌います。だから、まず満足させて心の平静を得させてやることが良いのです。大人は満足すると、満足し切って向上心を失うことが多いのですが、それが大人と子供の違うところです。

そういう訳で、親は、わが子に不満を感ずることがいろいろあっても、できる限り良いように解釈できるものは解釈して、わが子の現状に満足していた方が良いのです。そうすれば、親の心も穏かになりますので、自然と子供の心も安定しますから、精神活動が活発になり、従って、進歩向上が生まれます。

それに引き換え、わが子の進歩向上を願うあまりに、わが子の欠点だけを捜し求めていますと、どうしても不満が生じ、不快になり、いらいらして心の安定が失われます。親がそうなりますと、子供もその影響を受けて精神の安定を失い、従って、精神活動が停滞するようになります。




さて、愛子ちゃんの場合にも、二通りの評価が出来ます。お父さんの評価は、残念ながら、暗い、悲観的な面をより多くとらえているように思われます。そのため、それがいくらかでも愛子ちゃんの進歩の足を、引っ張ったことがあったのではないか、そういうことも考えられるのです。

そうではなくて、愛子ちゃんは、事実、障害児としては明るい材料がいっぱいあるのですから、明るい面だけをとらえるようにして、お父さんがもっと楽しそうに明るくふるまったら、愛子ちゃんは、今よりももっと目ざましい進歩を見せたかも知れません。

こんな言い方をするのは、大層酷だと思います。こんなことが言えるのは、私が愛子ちゃんのお父さんではないからかも知れません。私が愛子ちゃんのお父さんだったら、やはり暗い面ばかりを捜して、明るい面を見落としているかも知れません。確かに明るい面ばかりを見て満足するということは、大変にむずかしいことだと思います。

けれども、どんなにむずかしくても、そうするようにしないと、わが子のために良くありません。いや、そうすることがむずかしいからこそ、親としてそのように努力しなければならないと思うのです。

さて、今まで、愛子ちゃんのお父さんからの手紙を通して、愛子ちゃんの成長の道程を紹介しながら、その教育法を考えてきました。手紙はもっとあったのですが、現在手元にあるのは以上で、あとはどこかに納められたまま、今取り出すことができません。

最後に、一昨年、この本の刊行を企画した時に、愛子ちゃんのお父さんに、この手紙を公開したいが公開してよろしいかどうか同意を求めた際、御意見を頂きました。それを次に紹介して、愛子ちゃんの記録の結びにしたいと思います。

**昭和五十三年六月十日の手紙**（手紙の公開に同意する返事）

（前略）愛子も四年生（九歳四か月）になり、元気に毎日往復五キロの道をお友達と楽しく登下校し

ています。

特殊教室の担任の先生も、三年生から変わり、若い男の先生です。男三人、女二人の五人クラスです。特殊教室の様子は、以前と余り変わりありません。学校のことは学校の先生に任せて、余り気にかけないようにしているのですが、どうしても気になり、あせります。

時折、学校の様子を見に行くと、同じ四年生の普通学級を見て、かなり程度が高くなっているのに驚かされています。事故さえなければ、同じように勉強ができたのにと、残念で仕方がありません。

他校のいくつかの特殊教育や養護教室等も、参考になることがありはしないかと、時折訪問したり、参考になる記事を求めて本屋を回ったりしています。

会社からの帰宅後は、以前と同じように、愛子と楽しく遊んで過ごしています。愛子は、二人で過ごす一、二時間を、毎日、楽しみにして待っています。一対一で学習させれば、普通児と違って長い時間はかかりますが、教え方次第で覚えることができると、思うようになってきました。どう教えるかがむずかしいのですが、少しずつ、少しずつ進歩してくれるのが嬉しいです。

さて、お手紙の件ですが、

① 往復した手紙が、私どもと同じ不幸な親子の方々に参考になりますなら、役立ててほしいと思います。愛子の名前を、実名にするか仮名にするか、家内といろいろ話し合った結果、愛子は女の子でもあり、将来、このために万一の不都合なことが起きるのを心配します。

それに、現状の愛子は、まだまだ実名で発表して頂ける子供ではありません。もし回復できる確信が得られるならよろしいが、まだまだむずかしいように思います。できることなら、仮名でお願いできましたら幸甚です。よろしくお願い致します。

② 伝えたいこと

不慮の交通事故で九死に一生を得たわが子。意識不明の二週間。病院生活。それから通院生活を通して、何をおいても健康の大切なことを痛念し、まず体力作りに専念しました。体力が出てくれば、自然に頭の働きも少しずつながら、しっかりとしてくることを痛感します。まず、体力作りが一番大事だと思います（●●●は著者、以下同じ）。

●●●●　●●●●●●●●●●　●●●●

知的面は、石井先生の〝漢字の読み方ゲーム〟が突破口になり、厚い厚いコンクリートの壁が破れて、明るい日ざしがさし込み、今私ども親子は、第一歩を石井先生のお陰で踏み出したところです。

毎日の、一日一日の、小さな小さな積み重ね、根気と小刻みの繰り返しで、今後も精一杯、未知の可能性を信じて、親子ともどもがんばる覚悟です。現在が遅れている、劣っている、と言って悲観せず、明日という日を信じて努力していきたいと思います。

次に、私の手持ちの本の中から、数冊の本を紹介します。参考になれば幸甚に思います。

『親こそ最良の医師』（グレン・ドーマン著・サイマル出版会発行）

『ドーマン博士の幼児開発法』（ドーマン著・講談社発行）

『石井方式漢字の教え方』（石井勲著・学燈社発行）

『太陽に向って走れ』（マリリン・M・シーガル著・日本文化科学社発行）

（著者注、本書の著者は脳障害児の母親。ドーマン博士の指導を受けて重度の身障児が障害を克服していく道程の報告書。リーダーズダイジェストに要約され紹介されて、世界中の読者を感動させた本）

『月刊花園文庫』（石井方式漢字の絵本・登龍館発行）

③ 愛子の以前と現在

（イ） 漢字ゲームを始めたころ（五歳）

幼稚園に行っていましたが、お友達と同じことができず、長い時間座っていることもできず、教室から抜け出して外で一人でブランコに腰掛けたり（ブランコを揺らすことができなかった）滑り台を滑ったりしていることがありました。

午後になると、疲れて机にもたれて寝ている日が多かったように思います。日によって頭が痛いのか、顔をしかめて、家に帰るとたたみの上で寝転がっていました。

家から四、五百メートル先の遊園地まで、行きは手をとって歩かせて行きますが、帰りは私が背中におぶって帰らなければならない状態でした。

とにかく、弱くてすぐ病院に駆け込むことが多くて困りました。熱が出ると、頭部損傷の後遺症が出ないかと、そのたびに心配しました。

家では、童謡のレコードをかけて、それを聞かせるのが精いっぱいの状態でした。

（ロ） 現在（特殊学級四年生）

1 五百数枚の漢字カードが読めるようになりました。
2 一年生の学習漢字七十六字はほとんど書け、今は二年生の漢字を練習しています。
3 平がなは全部読み書きができ、一、二行の文が作れます。
4 一年の国語は『上』『下』とも上手に読みます。現在二年『上』を学習させています。月刊花園文原や講談社の絵本も、読ませたり読んでやったりしています。
5 カタカナは全部読め、今、書けるように練習しています。
6 三キロ離れた公文算数教室へ、自転車に乗って一人で行き（毎週、月、金の二日）課題をやって帰って来ます。
7 時計は何時何分と読めるようになりました。
8 トランプ遊び（ババ抜き、七並べ、時計、戦争等）ができます。
9 百円以下の買い物ゴッコができます。
10. 講談社の昔話絵本や花園文庫を一人で読んでいることがあります。
11. 年下の子とよく遊びます。
12. 台所、畑仕事、掃除等、いろいろなお手伝をします。今日も、学校から帰ると、家中で田植えをしている所に来て、「私もやりたい」と言って、田植えの手伝をしました。
13. 水泳は、昨年、ビート板にとまり、二、三メートル泳げるようになりました。

## 4 愛子ちゃんのその後

### 二年ぶりに来た手紙

この五十三年六月の手紙を頂いてから、特に連絡をし合うということはやめました。ここまで力をつけ、自信に満ちた毎日を送れるようになった愛子ちゃんに、いちいち指示する必要がなくなったからです。御両親の熱意と、愛子ちゃんのがんばりを、陰ながら応援しようと思っていました。

ところが、この本の原稿を書き終えたころ、二年ぶりで愛子ちゃんのお父さんから、お手紙を頂きました。それによると、愛子ちゃんの現状は決してよいものではありませんが、じっくり障害と闘う姿勢がうかがわれました。またそれには、愛子ちゃんの手紙も同封されていました。しっかりと大きな字で

書かれた手紙を読んで、感激しました。脳障害にめげず、ここまで読み書きできるようになった愛子ちゃんに、心から拍手を贈ります。

**お父さんからの手紙**

五月一日、今日は、愛子が車にはねられ、頭蓋骨骨折の事故に遭い、意識不明で入院した日です。月日の過ぎるのは早いもので、愛子も十一歳、六年生になりました。

一年生、二、三、四年生までは、投薬で後遺症の癲癇発作はコントロールされていたのですが、四年生の冬休み頃から徐々に悪化し始め、投薬でコントロールできなくなりました。一日に数回、多い日には十回以上も発作が起きて倒れるようになり、病院を方々回って歩いたのですが、良くならず、今年の一月から国立療養所、静岡東病院（癲癇センター）に入院、治療を受けております。

現在は、学習等、他の事は一切考えず、治療に専念しております。早く発作がコントロールされて、元気になることを毎日祈って過ごしています。

愛子の手紙、同封いたしました。元気になったら、またお力添えを宜しくお願いします。取り急ぎ近況をお知らせまで。

昭和五十五年五月一日

愛子父　〇〇〇〇




石井先生

**愛子ちゃんからの手紙**

石井先生、わたしは十一さい、六年生になりました。ようちえんの時、かん字のゲームを、先生におしえてもらったので、本を、よんだり、字を、書いたり、できるように、なったと、お父さんに聞きました。先生、ありがとうございます。

わたしは、今、しずおかのびょういんに、お母さんといます。びょういんのまどから、ふじ山が見えます。

早くびょう気がなおってお父さんや、お兄さんのいるおうちに、かえりたいなあ。東京もいきたいです。さようなら。

五月二日

愛子

**反復練習することも大切**

どうも手紙が間遠になっていたと思っていましたら、やはり愛子ちゃんの病状が良くなかったのでした。

一日数回、多い日には十回以上も癲癇発作が起こるようになり、御両親は病院を求めて方々を歩き回っていたのでした。とても、学習のことを考える余裕などなかったのです。

脳傷害によるこのような発作を無くするには、その損傷部位を外科 手術により切除することで改善される場合もある、とドーマン博士は言っています。大脳の神経細胞は、他の細胞と違って、分裂・増殖することができません。だから、一度傷ついた神経細胞は永久に良くなることがなく、また、この細胞は、死んだらそれでおしまいです。その代わり、最初から一四〇億個という、使い切れないほど大量の神経細胞が用意されているのです。それは、一生よく使っても、数分の一に過ぎないと言われているほどの量です。

だから、愛子ちゃんの場合も、外科手術という方法があるかもしれません。でも、大脳という最も重要な所だけに、その手術は容易なことではありません。従って、手術を引き受けてくれる病院や医師を、見つけることが大変だと思っています。ことに、このような手術が盛んに行なわれるようにはまだなっていない現在、手術が必ず成功するという保証がありません。

ただ、薬によって発作をおさえる方法が、年ごとに進んでいます。愛子ちゃんも数年来その治療を受けているようですが、その方法によって一日も早く発作が起こらないようになることをお祈りします。

愛子ちゃんの手紙を見ますと、御両親の苦労のほどが偲ばれます。正常な大脳を持った子供でも、これだけのことが考えられ、これだけの文が書けることは、決して容易にできることではありません。

だから、愛子ちゃんの発作が治まり、学習できるようになっても、これ以上の漢字の読み書きを望まず、今のこの力を十分に反復活用して、確実なものにすることに努めた方がよいと思います。

頭の働きは、頭を使うことによって良くなるのですが、それは新しい漢字を覚えることよりも、すでに覚えている漢字を、反復練習することの方が有益だ、と私は思っております。

一般には、その反対に考えられていて、覚えてしまった漢字の練習をしないで、新しい漢字を覚えることに力を入れがちです。

しかし、これは間違っています。新しい知識を増やそうとあせらずに、現在持っている知識を十分に

活用することに力を入れることの方がずっと大切です。

それがほんとの力をつける道です。

愛子ちゃんの手紙を見て、そんなことを思いました。